

令和5年度

学校防災ボランティア事業

活動報告書

令和5年8月8日（火）～11日（金）

もくじ

1	活動の概要	1
2	主な活動内容	2
3	参加者一覧	5
4	参加生徒のレポート	6

1 活動の概要

(1) 趣 旨

近い将来南海トラフ地震の発生が危惧される三重県では、県内の高校生が自らの命を守り抜くことに加え、支援者となり得る視点から、安全で安心な社会づくりに貢献できる知識や能力を習得することが求められています。

そこで、県内の高校生を東日本大震災で被害を受けた東北地方（福島県・宮城県）に派遣し、現地の方々との交流やボランティア活動、被災体験・復興についての学習や現地高校生との防災合同学習を行うことなどにより、大規模な自然災害発生時に地域で自ら行動できる防災人材の育成に取り組みます。

(2) 期 間 令和5年8月8日（火）から8月11日（金）まで 3泊4日

(3) 訪問先 福島県双葉郡広野町、宮城県東松島市、石巻市

(4) 参加者 計34名

【高 校 生】 25名（県立18名、私立7名）

【同 行 者】 9名

大学教授 1名、養護教諭 2名、指導教諭 1名、大学生 2名、
県教育委員会事務局 3名

(5) 日程ならびに内容

日 程	内 容
第1日 8月8日 (火)	午前：三重県庁で出発式 【三重県から福島県まで移動（貸切バス）】 夜：宿舎着 宿泊：福島県双葉郡内
第2日 8月9日 (水)	午前：福島県立ふたば未来学園高校（双葉郡広野町）と三重県の高校生による防災合同学習会 午後：【福島県から宮城県まで移動（貸切バス）】 震災遺構大川小学校（石巻市）にて 語り部による講話（語り部：大川伝承の会 佐藤敏郎さん） 宿泊：宮城県東松島市内
第3日 8月10日 (木)	午前：東松島市あおい地区でのボランティア活動（住民の皆さんとの交流） 午後：講話「災害医療とところのケア」（講師：岩佐郁子さん） 講話「避難所運営」（講師：東北大学 齋藤幸男 非常勤講師） 講話「復興への取組」（講師：東松島市あおい地区 小野竹一 会長） 宿泊：東松島市内
第4日 8月11日 (金)	午前：【宮城県から三重県まで移動（貸切バス）】 夜：三重県庁着・解散

2 主な活動内容

【1日目 8月8日（火）】

出発式

三重県庁1階ロビーで^{ひろた}廣田副知事、^{ふくなが}福永教育長の立ち合いのもと、出発式を行った。宇治山田商業高校3年生の^{はまだ こうや}濱田 暁弥さんから生徒代表挨拶を行ったあと、廣田副知事から激励の言葉を受けた。



濱田 暁弥さん



廣田副知事からの激励を聞く生徒

【2日目 8月9日（水）】

福島県立ふたば未来学園高校生徒との防災合同学習会（福島県双葉郡広野町）

両県の高校生が4グループに分かれ着席。ふたば未来学園高校による同校の創設の由来の説明のあと、三重県の災害・防災学習を発表した。その後、「災害発生前に取り組むべきこと」「災害発生後に取り組むべきこと」「風評被害の払拭のために取り組むべきこと」をテーマにグループワークを行った。



発表する三重県生徒



グループワークの様子

石巻市震災遺構 大川小学校での語り部による講話（宮城県石巻市）

校舎の被害状況を目の当たりにしながら、大川伝承の会 語り部 ^{さとう としろう}佐藤 敏郎氏から避難判断の重要性について説明を受けた。



語り部の話を聞く生徒



語り部の話を聞く生徒

【3日目 8月10日（木）】
宮城県東松島市あおい地区でのボランティア交流

3グループに分かれてあおい地区の災害公営住宅の住民の方に対して、足浴・マッサージを行い、東日本大震災時の話を聴かせていただいた。

その後、あおい地区の役員の方々との意見交換会でも、震災当時のお話を聞かせていただいた。



足浴・マッサージの様子



意見交換会の様子

講話「災害医療とこころのケア」（あおい地区集会所）

石巻赤十字看護専門学校元教員の岩佐 郁子^{いわさ いくこ}氏から、震災当時、看護学生が被災者をケアしたことなどについて、講話をいただいた。



岩佐氏



講話を聞く生徒

講話「避難所の設置と運営協力」（あおい地区集会所）

東北大学非常勤講師の齋藤 幸男^{さいとう ゆきお}氏から、地元県立高校の教頭だった震災当時、学校での避難所運営にあたった経験などについて講話をいただいた後、心を開いて対話する方法についてグループで話し合った。



齋藤氏



グループセッションの様子

講話「復旧・復興と被災者支援」(あおい地区集会所)

あおい地区会長の小野 ^{おの} ^{たけいち} 竹一氏から、あおい地区を日本一のまちにするための取組について、講話をいただいた。



小野氏



集合写真

【4日目 8月11日(金)】 帰りのバスの中で振り返り

学校防災ボランティア事業に参加して、良かったところ、自身が成長できたところ、学んだことを周りの方々にどのような手段・方法で伝えたいか、どんな活動につなげたいかの振り返りを生徒全員で発表し合った。



発表する生徒



発表する生徒

3 参加者一覧

【生徒】

No.	市町名	学校名	学年	名前	ふりがな
1	桑名市	桑名北高等学校	3	古橋 拓実	ふるはし たくみ
2	四日市市	四日市高等学校	2	小川 紗葉	おがわ さよ
3	四日市市	四日市南高等学校	1	渡辺 夏菜	わたなべ かな
4	四日市市	四日市西高等学校	3	望月 妃菜	もちづき ひな
5	四日市市	暁高等学校	1	角田 栞理	かくだ しおり
6	津市	津工業高等学校	1	内田 悠成	うちだ ゆうせい
7	津市	久居高等学校	3	伊藤 隆翔	いとう たかと
8	津市	久居高等学校	3	岩本 美優	いわもと みゆう
9	津市	久居高等学校	3	岸井 謙汰郎	きしい けんたろう
10	津市	久居高等学校	3	中西 真祈	なかにし まさき
11	津市	久居高等学校	3	吉浦 脩太	よしうら しゅうた
12	津市	セントヨゼフ女子学園高等学	2	坂 史香	さか ふみか
13	津市	セントヨゼフ女子学園高等学	2	鈴木 珠生	すずき しゅき
14	津市	セントヨゼフ女子学園高等学	2	宮口 真緒	みやぐち まお
15	津市	高田高等学校	2	勝田 喬久	かつた たかひさ
16	津市	高田高等学校	2	田中 大翔	たなか ひろと
17	津市	高田高等学校	1	豊田 真羽	とよだ まう
18	大台町	昴学園高等学校	2	笹木 修吾	ささき しゅうご
19	大台町	昴学園高等学校	3	白須賀 悠希	しらすか ゆうき
20	大台町	昴学園高等学校	3	橋本 和磨	はしもと かずま
21	大台町	昴学園高等学校	2	山中 百合花	やまなか ゆりか
22	伊勢市	宇治山田商業高等学校	2	裏地 花	うらじ はな
23	伊勢市	宇治山田商業高等学校	3	濱田 昶弥	はまだ こうや
24	名張市	名張高等学校	1	今岡 龍巨	いまおか りゅうき
25	名張市	名張高等学校	1	亀岡 晴人	かめおか はると

【同行者】

	所属	役職	名前	ふりがな
1	四日市大学	副学長・教授	鬼頭 浩文	きとう ひろふみ
2	四日市大学	2年生	落合 海吏	おちあい かいり
3	皇學館大学	3年生	上村 駿介	うえむら しゅんすけ
4	桑名市立多度青葉小学校	養護教諭	木村 美佳	きむら みか
5	四日市立大矢知興讓小学校	指導教諭	藤堂 英太郎	とうどう えいたろう
6	鈴鹿市立清和小学校	養護教諭	森 啓子	もり けいこ
7	三重県教育委員会事務局	主査	渋谷 陽子	しぶたに ようこ
8	三重県教育委員会事務局	班長	瀧川 昌俊	たきがわ まさとし
9	三重県教育委員会事務局	係長	佐々木 晃	ささき あきら

4 参加生徒のレポート

(生徒から提出のあったレポートを、原則、原文のまま掲載しています。)

桑名北高等学校 3年 古橋 拓実

まず、福島県立ふたば未来学園高等学校での防災合同学習会では、福島県の抱える復興課題と三重県の防災課題を絡めて意見の交流を行いました。このとき、福島県ではALPS処理水の海洋放出などの課題があり、ホットな話題についても触れることで、より現実的に災害復興について考える機会となりました。

次に震災遺構大川小学校での佐藤氏による講話では、なぜ悲惨な出来事が起こってしまったのかを説明していただきました。日頃から災害が起こった際の避難先についてなど、いざ災害発生時に混乱が予測される問題についてよく検証し、それに備えることで災害時の死亡率を大幅に下げることが可能であるとわかりました。

翌日、災害公営住宅でのボランティア演習では、あおい地区の災害公営住宅等にお住まいの方々に足浴をさせていただきました。当時震災が起きて、それが落ち着いた後、足浴などの被災者の方々との交流で体のケアから心のケアを行い、被災者の気持ちに寄り添っていたのだとわかりました。また、その後の雑談の際、あおい地区の広報担当の方の話をお聞きしました。その方は多彩な経歴をお持ちの方でした。先手をうつことや、様々な視点で予測をし、

想定外ということを最小限に減らす努力が何事にも大切であると説かれ、大変ありがたいお話を伺うことができました。

また、昼食を挟んだその後の講話では、避難所の実情について、そしてその避難所で発生する問題への対処法についてのお話をお聞きました。避難所では理想通りにはいかず、ストレスから大人同士の揉め事が頻発したり、災害直後は食糧難や、十分な治療を受けられないなどの問題が顕在化したりなど、さまざまなトラブルに見舞われるということを知りました。

私は大学へ進学後、学生生活の傍ら予備自衛官になろうと考えています。予備自衛官として、災害が起きた際、被災地での救助活動などによって社会に貢献することができたらと思います。

四日市高等学校 2年 小川 紗葉

1 日目はバスの中で東日本大震災の当時の津波の様子などの映像を見ました。今まであまり東日本大震災の実際の映像を見るのがなかったので衝撃がとても大きかったです。その映像には津波から逃げる実際の人の声も入っていて、より現実味があると思いました。また被災者の方へのインタビューでは一人一人の生の声が聞けてとても参考になりました。

2 日目はふたば未来学園へ行って高校生の方とお話をしました。そこで高校生の方が「福島出身だと言うのが怖い」と言っていたのがとても印象に残りました。原発事故の影響は震災から11年以上たっても根強く残っていることを改めて実感しました。午後から大川小学校を訪れました。壊れた校舎を見て震災の現実味を感じました。また語り部の方の「ここを特別な所と思って欲しくない、ここにはいつもの日常があった」という言葉を聞いて校舎にいる子供たちや先生達のことを想像出来て津波と判断ミスによってそれが突然失われたんだと実感し、避難訓練の大切さを改めて知りました。

3 日目はあおい地区に行って足浴のボランティアをしました。あおい地区の方々はみんな仲が良く親切で話しながらリラックスして楽しくボランティア出来ました。午後からは「災害医療」、「避難所運営」、「復興」についての講話を聞きました。「災害医療」では看護学生の方々が率先して自分たちにできることを探し、多くの人のために奮闘したという話を聞いて、いざと言う時にそのような判断をすぐにできるのがとてもすごいと思いました。私も災害が起きた際は自分に出来ることを探して実行したいと思いました。「避難所運営」では役職を縦に決めるのではなく横に広げることが大切だと思いました。自分たちも震災で余裕が無い時にそれでも避難者のために支え合って行動することは話で聞くよりも難しいことだと思うけど自分もなるべく皆で支え合えるように行動したいと思いました。「復興」ではあおい地区での取り組みをたくさん聞いて建物などの復興も大切だけど心の復興もかなり大切だと思いました。

4 日目はバスの中で南海トラフ地震について学びました。これまでの4日間で災害が起こる前、起こった後についてすべきことを沢山学んだのでそれらが活かせるようにしたいです。

8月9日 ふたば未来学園高等学校

今までに見たことがないほどの大きくてきれいな高校だった。

学校の中に、大学生がいたり、カフェがあったりなどすごく発達しているなど思った。

話し合いのテーマ：災発生前に取り組むべきこと

- ・家族での決めごと
- ・避難場所・経路
- ・備蓄品
- ・各学校で行っていること

4つに意見がまとまった。災害への備えとして、していることの違いはふたば未来生の人たちとさほどなかったです。違いがあまりないということは、それだけどの地域もしっかり備えてあるのだと考えると、良いことだと思いました。

8月9日 石巻市震災遺構大川小学校

実際に大川小学校に通っていた娘さんを亡くされた佐藤さんにお話を聞いた。家族を亡くされた人の話を聞くのは初めてだった。救えるはずだった命、助かったはずの命だったのに、うらみみたいなものもあまり感じないお話をされていました。もし、私が同じ立場におかれていたらと思うと、とても苦しいです。「被災地と呼ばれる場所は元は被災地ではなかった」

3時32分～3時35分までに逃げた人は助かっていた。

3時37分にたまっていた水があふれ津波がどかんと来る。町の時計はすべてこの時間で止まっている。

きちんと対策をしていなかった大川小学校。先生たちは子供たちを校庭に座らせていた。親がむかえに来た子は帰っていった。(あとから聞くと帰りたくなかったそう。小学生の気持ちは分かる。) 山に避難しようと言った子も何人もいたが先生は止めた。決して、命をうばいたかったわけではない。

波が来る1分前に、避難することを決めた。だが、場所は、橋の近くの方で、津波が来る方向だった。1列で津波がくる方へ走り、行き止になり、立ち往生した。佐藤さんは、先生らは子供たちをだきしめたに違いないという。

私は今回のボランティア事業で、沢山という言葉で表せないほど、得るものがありました。語り部さんたちのお話で、当時の状況が目にかび、わかりやすく話してくださるので、より、想像しやすかったです。やはり、目にのこっているのが、大川小学校です。特に、「思い出しながら話します。思い浮かべながら聞いてください」という言葉が心に残っています。その言葉にいろいろな思いがつかまっているのではと私は思っていて、思い

出さないといけない物・事であるということ。思い浮かべないとそこにあった物がわからない。いろいろな言葉で表すのはむずかしい思いが私の中にはこみあげてきました。大川小での話で私はずっと泣いてしまいました。悲しんでほしくて話しているわけではない。同情で泣いてほしいわけではないということは感じとっていましたが、まわりの風景、せいびされてしまった学校の周り、色々なことに込み上げてくるものがありました。

自然にすごく涙が出ました。

あおい地区での看護学生さんたちが当時していたことについてのお話には衝撃をうけました。たしかに考えれば、看護学生さんももうすぐ看護師になる方ですが、学生が看護をする、人を助けるということに、実感がなく、きいたときに、今の私とほぼ同じ人が…と
思ってしまいました。学生さんたちは、すごいいろんな思いがあったと思います。おぼれた人が来たなどと言われてましたので、学生ながら、いろいろなことを思われたと思います。私がおぼれた場にいたら、人を助けたいなんて思えないと思います。自分が自分がで、自分のことしか考えられないと思います。

私は、今回の事業で、防災へのいしきと、考え、そして、当時のことについて深く学ぶことができました。もし、震災があったとき、人を助けるほど自分はどうもいけないと思いますが、防災についてを広め、少しでも考えてくれる人がふえるように、事前の防災についてを大切にしていきたいと思います。

暁高等学校 1年 角田 栞理

私が今回のボランティア事業で特に印象的だったことが3つあります。

1つ目は、未来を拓く場所、大川小学校へ訪れたことです。

学校周辺の地域は住宅街がないのでなぜこのようなところに建っていたのだろうと思いました。しかし、津波に流され現在は危険区域となって住めないという話を聴いて、あの日以前は人の声があったのだと、普通の楽しい小学校だったのだと、何とも言えない思いを抱きました。そして改めて、私たちの生活も一瞬にしてなくなってしまうのだと実感しました。

語り部の方が、いざとなった時に自分の身を守るのは、「行動」することだけなのだと、そして判断ミスにならないようにあらかじめその行動を決めておかなければいけないとおっしゃっていたので、様々な場面での行動を日常から考えるように意識するようになりました。

2つ目は、講話「避難所の設置と運営協力」です。

私が思っていた避難所運営・訓練とは全く違うものを知ることができてとても新鮮でした。

正解ではなく、みんなで創り上げていく「成解」を求めることが大切だとおっしゃっていたのがとても印象に残りました。そして、避難訓練だからこそ本気で取り組むというのが、私が今回目標としていた学校の避難訓練改革を推進する、をととても体現していると思いました。

3つ目は、講話「復興への取組」です。

あおい地区の皆さんは被災されたのにもかかわらず、なぜそんなにも前を向いているのだろうと思っていました。

そこでこの講話を聴いて、地域でコミュニティをもち、日本一のまちを作るという目標に向かうことで、それが心のケアとなり、過ごされてきたからなのだと感じました。

以前までは、公営住宅は質素で暮らしを楽しめる環境ではないと思っていましたが、住民が意見を出し合ってルールを決めたり、10種類もの家のパターンを作ったりすることで、あおい地区が確立されたのだと知って感動しました。

今回このボランティア事業に参加できたことで今まで自分が思い込んでいたこととは違う、新しい視点を知ることができ、とてもいい機会となりました。東日本大震災をもとにした著書を読んだり映画を見たりしてみたいと思いました。

津工業高等学校 1年 内田 悠成

自分たちの班のテーマは「自分たちで吸収して、自分と周りの人の将来に生かす」というテーマで4日間福島県と宮城県で学習した。ふたば未来学園では防災合同学習会をし、津波被害や原発事故被害についてグループで話し合い自分の意見も言えたり皆の意見も聞くことが出来た。ふたば未来学園の生徒さん達はとても話すのが上手だった。大川小学校では、現地に行き、語り部の佐藤さんからお話を聞いた。窓ガラスも割れていてコンクリートも崩れていて、災害を想像出来るくらいのリアルなお話も聞かせて頂いた。佐藤さんは娘さんを津波で亡くしておりとても悔しそうだった、自分も津波を他人事のように考えれないと感じた。あおい地区では住民の人と足浴を通して交流した。最初は緊張して被災体験の話詳しく聞くことが難しかったけど、住民の人に優しく接してもらい、被災体験やそれ以外のことも話せてとてもいい経験だった。あおい地区の役員の方々の講話では災害が起こった後の事や避難所での問題などを聞いた。話を聞いているうちに自分にも出来ることがあり今後も活かしていきたいと思った。震災のことについて学べたのも良かったけど他校の子達と話し合ったり仲良くなったりできてとても楽しかったです。最初は防災について興味がなかったけど、今回のボランティアを通して、災害を人任せにせず助けになれるようもっと防災について勉強していこうと思った。

最後に班の目標である「自分たちで吸収して自分と周りの人々の将来に生かす」という目標を達成できるように今回学んだことを学校や家族などの周りの人に少しでも理解して頂けるよう努力していく。今回のボランティアに行くのは少し不安だったけど、どの体験もいい経験になり自分が少し成長できたと思いこのボランティアに参加してとても良かったなと思いました。

私は、今回の学校防災ボランティア事業に参加して、災害や福島などに対する意識がとも変りました。私が、特に印象に残っているのは、宮城県の大川小学校に行って、大川伝承の会の佐藤さんのお話を聞いたことです。

大川小学校がある石巻市では、東日本大震災が起こる当日の朝まで、いつもと変わらない日常があったと聞き、私は想像するだけでも胸が締め付けられる様な感じがしました。また、大川小学校が建っている場所は、海拔12メートルで、海からの距離は、3.7キロと一見津波の心配は無さそうに思うのですが、小学校の隣には、少し川幅の広い川が流れており、川を逆流してきた津波によって、その辺一帯は一瞬にして人も家も何もかもが無くなったと聞いて、とても恐ろしいと思ったからです。

私は人を助けることが大切だと思っていましたが、1番大切なのは自分の命を守ることだとわかったので、大川小学校で起きた、事前の取り組み不足が無いように、予め避難場所を家族や知人と共有して、とにかく逃げる事を優先しようと思います。

私はこの学校防災ボランティア事業を通して人との繋がりの大切さとどのようにして自分の身近な人を助けられるかを学びました。またなんとしてでも逃げるのが大切だと改めて感じました。

被災地である福島県、宮城県に訪れた際印象に残っていることが二つあります。一つ目は、大川小学校へ訪れたことです。私は佐藤さんという津波で娘さんを亡くしてしまった方からお話を聞きました。その中で、大切なものは何もいらなからすぐ逃げろということをおっしゃっていました。自分が逃げることによって周りも動いてくれるし、助かる命が多いのだと気づきました。もし自分が被災してしまった時には冷静な判断が取れるような人になりたいと強く決意しました。逃げることも大切ですが周りを守るためにも大きな声で声をかけたり、すぐに行動に移せるようどこに逃げるか確認したりしたいと思います。二つ目は、足浴体験です。足浴をしている際に出会った方がいてその方は旦那さんを亡くしていた方でした。話を聞いている中で、その方は孤独を無くそうという活動をしていました。アパートを一軒一軒回っていると聞いて誰も見捨てないと言う気持ちがとても伝わってきました。また、自分自身で生きていくという強い意志を感じられてとても明るい方でやはり人との繋がりは大切なんだなと感じました。

私は初めてこの事業に参加した理由が人を助けられるそんな人材になりたいという意思で参加しました。私達が被災した時にはどのような対処を取れば良いか、どうしたら尊い命を守れるかを改めて学ぶことができました。もし被災した時に自分ができることは、防災マップを確認したりどこに逃げるか確認したりするのもとても大事ですが、その場で冷静な判断ができるような人になりたいです。そうして自分の身近な人以外の人も守れるように絶対になります。

今回の活動を通して、実際の震災の規模や、被災地での生の声を聞き、学ぶことができました。その中でも、福島のかたば未来学園で考えた、津波と原発の被害の違いなど、普段考えることないことを考える機会が、多くありました。その中で、地元でも活かせるような取り組みがありました。

日頃からの活動がいかに大切であったか、どう活かすか、など様々な当時の被災地での様子を聞くと頭に浮かび上がってきます。

また、足浴などの体験から、現地の方々は多くのことを教えてくれました。

実際の現場に行かないと知りえないこと、感じれないこと、学べないことが沢山あったボランティア活動でした。

自分の将来の目標である消防士に役立つ目的とは別に、今回学んだことがいずれ起こるであろう南海トラフ地震に向けた、被害を少しでも減らす取り組みになったと思います。

ボランティア事業に参加して、印象に残ったことは、大川小学校です。宮城県にある大川小学校では、東日本大震災が原因で津波が起これ、多くの生徒や教師の方が亡くなりました。大川小学校では避難訓練などの時に津波が起きた場合の対応、避難場所の確認をしておらず、津波が起きてから避難場所を決め、多くの方が逃げ遅れてしまいました。ですが他の小学校ではほとんどの生徒や教師の方は助かっています。なぜなら、助かった学校では避難訓練の時点で津波が起きた時の避難場所が決まっています。他にも生徒達が山に避難をしると学校の生徒達に呼びかけをし、多くの命を守りました。私は大川小学校の話聞き、まず避難訓練の時点で適当にしすぎているのと近くに大きな川があるというのに避難場所を作っていないというのに疑問を持ちました。そこで、私が考えたのは地震や津波が起きた想定をしていなく、避難訓練の時点でやり過ぎてしまっているということです。避難訓練の時から津波が起きた際の避難場所を作っておき、生徒達に避難場所を染み込ませておけば誰か一人がその場所へ逃げる所を見て、一斉に多くの生徒達も一緒にそっちに行くと思います。その結果、生徒や教師は助かるに違いありません。私はこのことを考えてから、周りの人たちに大川小学校で起きたことを共有し、家族とは地震や津波が起きた際の避難場所の確認や非常食の確保をしました。これからも呼びかけを続け、守れる命を救いたいです。

私は高校生で大川小学校のことを聞いてとても良い経験になりました。これから高い確率で起きるとされている南海トラフは最大震度7、津波の高さは高い所で十メートルとされています。なので私は、この経験を生かして、これからも予防できものは、しっかり準備をしていきたいと思っています。

私が大規模地震が起きた際、消防士として財産を守るために必要なことは、普段から災害と向き合いつぐ行動できるようにすることだと思います。また、家族や周りの方にもすぐに行動できるよう呼び掛けることです。

私は、高校野球を引退し、ボランティアの行動に力を入れました。私は、東北地方の福島県に東日本大震災で被災された方々の話を聞いたり、交流したりするボランティアに参加をしました。一番心に残っている話は、大川小学校の話です。東日本大震災が起きた当時小学六年生で命を落してしまった父親が話をしてくれました。大川小学校の生徒、先生は地震が起きてもすぐに避難をしませんでした。ラジオの情報や地図を見たりして判断をしていました。生徒の中には泣きだす生徒や「今すぐ避難したい」という生徒もいたそうです。先生達が避難する場所を決め避難を始めてすぐに津波が来て大川小学校の生徒、先生は命を落してしまいました。地震が起きた後にすぐ避難をすれば絶対に助かる命だったと思います。東日本大震災が起きる前に東北地方では近いうちに大きい地震が起きると予想されていました。今私たちが住んでいる地域でも近いうちに南海トラフ大地震が来ると言われています。大川小学校では、地震が起きた時の避難訓練はやっていました。避難訓練をやっていても命を守ることができませんでした。だから今を生きる私たちが命を守ることができるように行動していかなければなりません。ハザードマップはあるだけでは命を守ることができません。ハザードマップを見てすぐに行動することで命を守ることができます。

最後に、ボランティアの経験をいかして、今を生きている人々に災害が起きた時に行動できるための行動力をつけ、一人でも多くの人に自分の命を自分で守れるよう災害と向き合っていける社会を作っていくことが消防士にとって必要なことだと思います。

セントヨゼフ女子学園高等学校 2年 坂 史香

今回訪れた福島県の双葉郡広野町と宮城県東松島市と石巻市で学んだことは本当に多くそして深いものでした。また、私は初めて東北に訪れました。

そのため事前に学習をたくさんしましたが、それでも生で見た景色や東日本大震災を体験した方からのお話を聞いたこと、感じた自分の感情は体験しないとわからないものだと改めて思いました。

最初に私たちは福島県立ふたば未来学園高校に行き、自分たちと同じ年齢の福島県の高校生と意見交流しました。そこでグループ討議を行ったのですが私たちのグループは「対話はなぜ必要なのか」というテーマで討論しました。私はこの話題について問われている意味が分からなかったのですが、福島県の高校生はよく問われる問題だそうでした。私はこの話題については問われている意味が分かりませんでした。同じ国に住んでいるのに、何も知らなかった私はそのことについてびっくりしました。しかし一緒に考えるにつれ三

重県に置き換えて考えてみたり、自分の意見を伝えたり、とても楽しく意見交流できたと思います。

また同じ日に訪れた大川小学校では、小学校6年生だった娘さんがいたさとうさんという方にお話してもらったのですが、大川小学校を見ながら聞いた話はとても辛く、本当に現実かなと思うほどでした。大川小学校の人々がとった行動から学んだことを生かして周りの人に伝えたいと思いました。

次の日には東松島市のあおい地区での足浴を担当をさせていただいた方からもお話をきくことができました。この方からは被災された時のお話をたくさん聞かせていただきましたが、想像もできないくらい辛い話を聞かせていただきました。

また私は看護師になりたいという夢があり、このボランティアにさんかしました。本物の看護師さんからお話をきくことができ、とても良い体験でした。

セントヨゼフ女子学園高等学校 2年 鈴木 珠生

1日目は福島に行くバスの中で、福島県の震災被害の映像を見ました。今までは怖くて津波の映像をしっかりと見ていませんでしたが、今回しっかりと見て、津波の怖さや、自分達が行く福島について詳しく理解することができました。

2日目は、ふたば未来学園高校の生徒の方と防災についての意見を交わしました。私たちの班では、津波被害と原発事故被害の違いについて考えました。「見える」被害がある津波と「見えない」被害がある原発事故という点で違いがあり、「見える」ことでトラウマが残ることと「見えない」ことでずっと不安を抱いているということがわかりました。

午後からは大川小学校に行って、大川伝承の会の佐藤さんのお話を聞きました。佐藤さんは娘さんを亡くしているのに私たちにお話をしてくれてすごく心に残りました。実際大川小学校を訪れ、佐藤さんのお話を聞いたことで、山が想像以上に近いことや、事前に地震があったときの対応やどこへ逃げるかについて話し合っておくことの大切さを知ることができました。

3日目は、宮城県のアおい地区の方々と足浴や昼食を通じて交流をしました。私は肩揉みをしましたが、「ありがとう」と言ってもらってすごく嬉しかったです。また、アおい地区で災害医療についての講話を聞くことができました。私は薬剤師になりたいので、このお話を聞いてとてもよかったです。

津波によって、低体温症になっている人や、気管・心臓病の人や、精神病の人が避難してくる中でどのように治療していったかを知ることができました。また、避難所での感染症への予防が大切だということがわかりました。このことから、今、コロナウイルスが流行している中、災害が起きた場合、何をしていくべきかを自分なりに考えることができたのでとてもよかったです。また、この災害医療のお話を聞いてAIが職業をうばっていきだろうと言われていた今、医師と薬剤師は特に人間である必要があると感じました。災害が起こるとインターネット等が使えなくなり、AIが正常に働けなくなるし、働けたとしても、人々の不安は人間の温かさがなくなるといけないと思います。そのため 医師と薬剤

師は人間である必要があると感じ、自分が薬剤師になったら、人の不安を和らげ、笑顔にすることができるようになりたいという目標ができたのでとてもよかったです。

セントヨゼフ女子学園高等学校 2年 宮口 真緒

私はこの事業に参加し、様々なことを学び、感じることができました。

1日目は、バスの中で、「高校生が伝える福島県の災害被害」のビデオを視聴しました。私たちと同じくらいの歳の子ども達が震災による影響で家に帰れないという状況に晒されていることを改めて気付かされました。

2日目に訪れた福島県ふたばみらい学園では私と同じ高校生と防災活動についての交流を行いました。交流をしてくださったふたば未来学園の高校生の方は東日本大震災が発生した当時、はっきり、覚えていないものの、家族と共に避難生活をしていただきました。また、学校や自分自身で行っている防災活動について話し合ったところ、皆、「地震が発生したと仮定し、校庭に一斉に逃げる」といった、同じような形式の避難訓練をどの学校でも行っているということが分かりました。そして、避難訓練をもう少し具体的な内容を取り入れてするべきだという意見が出ました。例えば、放送を使わない設定、けが人が出た設定など、災害が発生した場合、起こりやすいトラブルを予想した避難訓練を学校に提案できたらいいなと思いました。また、大川小学校では、津波によって、娘さんを亡くされた語り部の方からお話を伺いました。語り部の方の「大川小学校は未来を拓く場所だと帰ったら伝えてください」とおっしゃられていた言葉が一番印象に残っています。

沢山の子ども達、教員が亡くなられたため、メディアでは「悲劇の大川小学校」と取り上げられていたことがありました。しかし、私達が本当に大切にしなければいけないことは、これからみんなで拓かなければいけない未来だと思います。そのためには、東日本大震災で起こった過去の出来事を忘れず、それを未来に繋いでいかななくてはならないのだと感じました。

3日目は、あおい地区の集会所で足浴ボランティアを行いました。地域の方々とおしゃべりをしながら行った足浴では、元気を与える側であるはずの私達が足浴に来ていただいた皆様に逆に元気をいただく形となるようなボランティアでした。私が足浴ボランティアの中でお話した男性の方は、東日本大震災の頃のお話をしていただきました。「山梨県から支給された貴重な食料のおにぎりは硬くて、食べるのが大変だった。また、寒い季節にも関わらず、シャワーは冷たく、生活するのが大変だった」と当時の様子を教えてくださいました。

また、現地学習会では、当時の災害医療に関するお話や避難所運営について、そして、復興に向けてのまちづくりの工夫についてお伺いしました。

4日目は、バスの中で、被災した中学生に関するビデオを視聴しました。東日本大震災の後、そのことについて、触れることが出来ない中学生に「命の授業」を行った学校のお

話でした。私は、震災で家族を亡くした少年が心に残っています。他人に言うことが出来なかった悲しみや苦しみなどの心の内を打ち明けることの大変さが伝わってきました。

この4日間、とても貴重な体験をすることができました。復興が進んでいる東日本大震災の被災地のために何ができるのか、そして、将来に向けて自分は何ができるのかをこれからも考え続け、それをどんどん行動に移していけるような人材になりたいです。

高田高等学校 2年 勝田 喬久

僕は今回の学校防災ボランティア事業を経験して防災に関する知識を身につけることができました。

1日目の朝、県庁での出発式で僕が三重県の高校生の代表としてボランティアに参加するということに気持ちが高ぶったことを今でも鮮明におぼえています。2日目にふたば未来学園高校の生徒さんとの交流がありました。僕の班は「災害発生前に取り組むべきこと」というテーマについて交流しました。そこで僕は自分の住んでいる三重県の取り組みと福島の人達の取り組みにどんな違いがあるのかを考えました。すると三重県と福島県の取り組みには大きな差がないことがわかりそのことから、被災していない地域でも被災した地域と同等の取り組みが行われていることがわかりました。

大川小学校では語り部の佐藤敏郎さんの話を聞き、教科書などでは触れられないようなディープな部分について話していただき被害の悲惨さを現地を見学することで身に染みて感じました。

災害公営住宅での足浴のボランティアでは被災者の方と実際に触れ合いながら話をすることで、家族の被害の状況や災害時の生活で困ったことなどの話を聞くことができました。災害時の食料の確保がとても困難だったとおっしゃっていたので非常食の確保は家に帰ってから家族と相談して2週間分はもつように買いだめすることにしました。

今回のボランティア活動を通じて災害時の行動の仕方や備え方について学び率先避難者としての知識と心構えを学ぶことができました。

高田高等学校 2年 田中 大翔

ボランティア活動に行く前に、東日本大震災や、大川小学校のことなどを調べていたつもりでしたが、実際にその場所に訪れてみて、話を聞いて、大川小学校では、1階の窓はなくなり、天井は、はがれおちて、体育館と校舎をつなぐわたりろうかも、たおれてしまったことは知っていたけど、ガラスばりのわたりろうかであったことや、海側の方向へわたりろうかがたおれていたり、そのことから、津波は海からきたのではなく川から波が逆流してきたんだということが分かった。また海の砂浜では、松の木が大量に津波の影響で抜けてしまい、その木が、大川小学校の教室の中にささってしまっていたりしていた。

また、宮城県石巻市の赤十字看護専門学校の話では、津波の波の中避難してきた人は、服に海水がしみ込み体の保温をうばって行ってしまっていたため、低体温症になってしまう人

が多くいたそう。その話を聞き心に残ったことは、避難所の運営をしていく中で、あらかじめ決まり決まったマニュアル通りに行うのではなく、今避難所にいる人たちで話しあい成解を求めることが必要であり、大人が避難所で本気になると子供も変わるということ、あおい地区では、災害危険区域内の人は国・県から補助金がでるが、それ以外の人は出ないことが少し不平等であると感じた。

あおい地区では、仮設住宅の大切さ、仮設住宅自治会の5つの大きな役割を学んだ。

- ・笑顔を取り戻すこと。
- ・孤独死を減らしていくこと。
- ・イベントなどで外へ出る機会を増やし、思い出をつくってもらうこと。
- ・ゴミとうばんや回覧板の回し方などルールを決めて守ること。
- ・みんなが次の居転先で、次への活力へつなげること。

どんな状況でもみんなで話しあい、ルールを決め守ること、大人が本気になって取り組むことで避難した際にも悪い思い出が減っていくのがいいと思いました。

高田高等学校 1年 豊田 真羽

この4日間で私は色いろな人と出会い、話を聞き、経験し、感じることができました。

私は今回初めて被災地へ足を運びました。そのこの現地の人は映画で見た時の人の表情より明るく、でも少し寂し気な表情をしていました。その時、身内や友達が亡くなってしまった人の瞳なんだと実感しました。

あおい地区でのボランティアで聞かせてもらった災害時の話はすごく苦しく、悲しく、鮮明に想像できてしまうような細かな話でした。その時を表現するかのように周りの様子などを話してくださいました。少し涙目で泣きそうな声になりながらも必死に話してくれました。そんな風に話を聞いているだけで私も泣きそうになりました。

私自身一番頭に残った話は大川小学校での講話です。娘さんを亡くされてしまった佐藤さんのお話でした。その時、その場で起こったことを移動しながら、全力で話してくださいました。大川小がどんな所なのか、もしこうしてれば変えられたかもしれないこと、子供たちがどんな風に逃げたのかなど色いろ教えてくれました。周りに少し泣いている人もいました。私も少し半泣きでした。

最後に、印象に残った言葉があります。「大川小がどんな所か聞かれたら未来を拓くって答えてね」と言われたこと、「山は助かる所じゃない、山に行くという行動が大事」だという言葉です。行動することは大事なんだと改めて思われました。

昴学園高等学校 2年 笹木 修吾

まず福島のホテルまで行くのに約10時間もバスで座ることになるとは思いませんでした、ですが防災のクイズ大会や、実際の災害の映像などを見る事で、暇を潰しながら学ぶ事ができました。ホテル一人部屋でとても過ごしやすく、ご飯が美味しかったです。

まず、最初に学びに行ったのはふたば未来学園という高校であり、現地の高校生と一緒に、震災や原発の被害について中心に話し合いました。私の班は震災や原発の被害の違いと震災の前に出来る準備はないかを話し合いました。その合間に福島の影響や逆に現地生徒から三重県の影響なども話し合いました。様々な観点から話し合い、学び、現地生徒と交流できとても有意義な時間でした。

次にいったのが大川小学校でした。大川小学校は東日本大震災で起こった津波による被害があり、児童 108 名中、生徒 74 名、教員 10 名が亡くなったそうです。私達は現地のガイドさんに話を聞き、大川小学校の被害を見ました。川の逆流が襲ってきたようで渡り廊下が海とは逆方向に横転しており、2 階との天井まで泥水の跡が残っていました。ガイドさんは実の子をこの津波で亡くしており、聞いていて津波の恐ろしさや、家族を亡くした苦しみなどが心で理解できました。ガイドさんによれば災害のことをみんな考えたくないのは怖い結果を見るからだから良い結果を想像し、それを実現するために考えると良いと言い、私も災害が起きたときのことを今一度考えようと思いました。

最終日は私達はあおい地区のみなさんと交流をしました。まず最初にあおい地区にいるご年配の方々に足浴をさせてもらいその中で震災の話なども聞かしていただきました。中には自分の家族に注意されなかったら津波に流されていたと仰る人もいました。足浴は初めてで力の入れ方が難しくお湯を多くこぼしてしまいました。お昼でも地域の人と交流し、今まで知らなかった話を聞けました。お昼後は東日本大震災直後の看護師さんたちの奮闘や避難所の運営方法について学びました。特に避難所では縦社会のルールではなく子供達の横並びの考えが必要だと聞き自分も貢献出来るようにと考えました。

今回のボランティアは僕という人間を一步進展させたいいい経験になりました。この考えを家族や友達にも教えて、少しでも南海トラフ地震が起きたときに救える命が増えるよう行動していきたいです。！！

昴学園高等学校 3年 白須賀 悠希

◎ふたば未来学園高校生徒との防災合同学習会

「対話はなぜ必要なのか？」をテーマにグループ討議をした。

難しい内容だったのでふたば未来学園の学生の方が授業でしていた処理水海洋放出での対話をもとにして話しあった。

◎大川小学校 講話

大川小学校はテレビなどの報道機関で取り上げられることが多く記憶に残っていたが実際行ってみるとテレビで見っていた大川小学校とはまったく違って見えた。

佐藤さんから当時の話しを聞いて救えたはずの命があったってことや考えるより先に行動するべきだということを知った。

◎あおい地区でのボランティア活動

被災したショックで耳が聞こえづらくなった方や自衛隊出身の方などがいた。足浴体験のとき腰が痛くなるなどつらいときもあったけど楽しかった。

◎災害医療とこころのケア
感染症対策の必要性を知れた。

◎避難所の設置と運営協力
従来の設置・運営は、縦型だった。それだといろいろな問題が発生してしまう。学生の考えた Web 型はその場で用途にあわせて部署をつくるので運営がしやすい。

◎復興への取組
日本一の町・子供や孫に残せる町を目指している。
ペットも1代だけなら飼うことができる。

今回このボランティア事業に参加できてよかった。知らなかったことや新しいことを知ることができた。災害がこんなに怖いものだとは再確認した。
もし参加していなかったら災害がおきたとき、僕はなにもできなかったと思う。でも今は、いざというとき動けるきがする。
楽しかった。

昴学園高等学校 3年 橋本 和磨

今回僕は生まれて初めて東日本大震災の被災地に行きました。東日本大震災で学んだことは東日本大震災を体験した人の話を聞いたことが心に残りました。東日本大震災を体験した人の話によると逃げるのに必死だったと自分の命の大切さに気がつけたということです。

それを聞いたことによって自分は福島に行く前までは平然としていたんですけど、行ってからは自分の命を守ることを優先してから他のことをやるように考えるようになりました。

今自分は高校3年生で来年から社会人です。社会人になったら就職して自分のお金で生活していかないとはいけません。もし南海トラフとか大きな地震が来たら自分のことは防災ボランティアで学んだことを生かしてみんなにも伝えていけたらいいと思っています。

昴学園高等学校 2年 山中 百合花

私が今回、学校防災ボランティア事業で、ふたば未来学園、大川小学校、災害公営住宅へ行き、震災について当事者のお話を聞かせていただくなどの、ボランティア活動を行った。

4日間で特に楽しかったことは、足浴をした際に、現地の方のお話をくわしく聞いたことだ。マッサージをしながら会話をすることで、無理に話題を考えなくても自然と話すことができ楽しかった。

4日間で特に良かったところは、ふたば未来学園に訪れ、班のメンバーと生徒で、色々な意見を交換できたことだ。私たちの班は、原発による被害と津波による被害について話したのだが、自分以外の意見を知ること、一つの課題についての様々な考え方も知れて良かった。

4日間で自身が成長できたと感じたところは、地域の復興についてより具体的で現実的な過程や話をきいた時のことだ。自分が今後どのように地域の活性化について行動していくかを具体的に考えられるようになり、自身の成長を感じられた。また、あおい地区の避難者支援の話聞き、現在あおい地区である程度不自由なく満足して生活できるようになるように、住みやすくなる規則を考えたり、地域や団体にも協力をもち掛けたりしてあおい地区を復興する小野さんの姿に感動した。

私は、今回の現地学習で学んだことを周りの方々に伝えるために、夏休み明けに、今回の研修で学んだことを学校内で発表し、この発表によって、避難訓練を今一度見直しなど災害防止につながることを目標にする。

宇治山田商業高等学校 2年 裏地 花

私は自分や周りの人の役に立つような防災の知識をつけ、将来に生かしたいという理由でこの事業に参加しました。福島県、宮城県を訪問し、現地の高校生との合同学習会、災害公営住宅でのボランティア活動など、4日間で様々なことに取り組みました。

この活動で得られたことはたくさんありますが、一番の学びは災害前の対策がとても大切であるということです。

大川小学校では、語り部の佐藤さんから、その日に多くの命が失われた状況について話を聞くことができました。判断や行動の遅れから被害が大きくなったため、やるせない気持ちを抱き、災害が起こったらどうするのかを必ず事前に決めて、周囲と共有しておくべきだと教えてもらいました。

ふたば未来学園高等学校では、防災の知識があるかないかでいざ災害が発生したときの行動が大きく変わる、と在学生在が教えてくれました。避難経路の確認、非常食の用意、災害時に使える電話番号を知るなど基本的なことから備えていきたいと思いました。

あおい地区では、役員の方々と交流したり、足浴のボランティアをしました。被災した当時の状況や、あおい地区での生活など貴重なお話を聞くことができました。また講話では、避難所を運営するときの注意点・工夫する点について、復興への取り組みについて学びました。震災後、医療が身体的にも精神的にも必要であると知り、被災者同士で協力していく大切さが分かりました。

災害について怖かったり考えたくなかったりすることも多いですが、それでも目を背けずに向き合っていくことが防災であり、私たちのしなければいけないことだとこの事業を通して強く思いました。まずは学んだことを家族など身近な人に共有したり、防災訓練でも気を抜かず危機感を持って取り組んだり、自分ができることから災害対策をしていきたいです。

宇治山田商業高等学校 3年 濱田 眺弥

一番最初の活動でふたば未来学園高校生徒との防災合同学習会を行い、そこでは、原発による被害と津波による被害の違いについて考えを深めた。原発は津波とは違い、建物が残っている状態で長い年月が経ち少しだけ帰れたりすることが可能。しかし、建物が無くなる津波よりも恐ろしさが伝わらないことがこの2つの大きな違いだと考えた。他には震災後すぐ原発の影響により自衛隊の方々が救助に行けず、本来なら助けられた命を助けられなかったというエピソードもあった。

次に大川小学校を訪れた。そこでは、実際に娘を亡くされた方による話を聞いた。この学校では二次避難先が想定されておらず、その場で議論を50分程行ったことや結果的に裏山に逃げず、津波方向の高い場所へ避難したりと不適切な対応が多くあった。

話してくれた方によると、南海トラフと同様に備えると言われていた地震であり、救えたはずの命であり、その方からはやるせなさや、悔しさが伝わった。また、この経験から、地震が起きたとしても自分は大丈夫だと考え塞がず、準備をして地震に備えてほしい、地震が起きた時には行動することが一番大事だと教えていただいた。

次に災害公営住宅でのボランティア活動を行った。そこでは住宅に住んでいる方と交流する機会があり、努さんという元自衛隊の方と話すことができた。この方に地震が起きた時何を意識することが大事か聞いたら、予測と予想が大事と教えてもらった。

その後、看護師の方の震災時の話を聞き、特に避難場所での問題を教えてもらった。

また、あおい地区の地域活性化方法を具体的に教えてもらい、震災に負けずに地域全体で努力し、結果全国 top10 に入りすごいと感心した。

名張高等学校 1年 今岡 龍巨

ふたば未来学園では津波と放射線の怖さの違いについて知りました。

津波は目に見えてどのぐらいの高さを見て逃げることもできるけど放射線は目に見えず、臭いもしないのでどのぐらい広がっているか分からず、逃げるできないということが分かりました。大川小学校では津波の怖さについて学びました。近くには川があり海からは数 km 離れているのに学校の2階の天井まで津波が届いていて近くに川や海があると津波のことも考えて逃げないと津波に流されてしまうなと思いました。津波はコンクリートまで破壊して進んでいき、学校の近くにあった建物たちを流していったため、現在の大

川小学校の周りには建物がなく、大川小学校が遠くから見ても破損していると分かりません。

津波はコンクリートを破壊しただけではなく植えられていた木も流してきて小学校の2階に入っていたそうです。

名張高等学校 1年 亀岡 晴人

今回の活動を通して僕は、被災した方々の話を聞いて、防災に関しての意識が変わりました。そしてこれから災害時にどうしていくかを考えていきたいです。

2日目の最初に行ったふたば未来学園高校では実際に被災地の学生と話せて、被災したと
きのために今のうちにできることは何か等のことを改めて意識することができて、2日目の最後に行った大川小学校ではそこで過去にあった惨劇を再確認させられて、そこでもし自分たちの地域でこういうことがおこったときどうすればいいのかを考えるようになって、2日目は災害が起こった時にどう避難したり、災害が起こる前に何をすればいいかなどを考える日でした。

そして3日目の最初に行ったあおい地区の集会所では、被災されたおじいさんおばあさんのお世話をしながら被災した時の話や全く関係のないおもしろい話だったりを話してくれて、楽しくもありながらためにもなるいい経験でした。3日目の最後に行われた3つの講話では、あの災害の裏で活躍されていた人たちのことや避難所の運営など今まで知らなかった人達の活躍や避難に必須な避難所のことなどを知ることができてとても役に立つ講話だったと思います。加えてバスの中で見たDVDでも、今後近い将来起こりそうな災害の危険や、これまで起こった災害の惨劇などを見て、やっぱり震災は怖いものだ改めて思いました。

この日本ではいつ、自分たちが生きている間に何回震災が起こるか分からないので、今回学んだことを被災時に活かしていけるようにしていきたいと今回の活動で思いました。これから被災した時に、今回の活動に参加して良かったと思えるように行動していきたいです。

令和5年度 学校防災ボランティア事業 活動報告書

編集・発行 三重県教育委員会事務局 教育総務課
〒514-8570
三重県津市広明町13番地
電話 059-224-3301
FAX 059-224-2319